様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２５日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007 ～ 2009
課題番号：19520377
研究課題名（和文）現代ドイツ語の標準化と脱標準化に関する社会言語学的研究
研究課題名（英文） A Sociolinguistic Study in terms of Standardization and Destandardization of Modern German

研究代表者
高橋　秀彰（TAKAHASHI HIDEAKI）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：60296944

研究成果の概要（和文）：

19 世紀末以来行われてきた標準化政策によりある程度の統一規範が達成されたが、同時に記述主義的傾向の増大と複数の国家変種の確立による規範の分散（Divergenz）が進行していることが明らかになった。このような規範の分散は言語的収束がある程度達成された後の現象であり、近代初期の多様なドイツ語への回帰とは異なる。こうした分散は、方言の使用域拡大や、国別標準変種の発展、ドイツ語圏の言語政策など、さまざまな要因により生じている。

ドイツ語の規範は収束と分散の段階を経て、多様な規範が共存する段階にいたっている。単一中心地的言語観に促された収束段階の後、多様な規範が対等の関係であると承認されることにより共存の段階に入っているのだ。EU における複言語主義の発展や言語権への意識向上なども影響し、さまざまな規範の再構築過程が進行中であることを示した。進行中の脱標準化を、ドイツ語規範の再構築の過程を提示した。

研究成果の概要（英文）：

On account of the standardization policy of the German language since the 19th century, the unification of the language norm is substantially realized. However, its diversification is underway owing to the growing tendency of descriptionalism and the establishment of national standard varieties. This phenomenon of destandardization, which is taking place after achieving standardization to a large extent, is not to be regarded as return to dialects. It is brought about by various factors, such as enlargement of the using domains of dialects, development of national varieties and language policies in German-speaking countries.

Norms of the German language are now at the stage of coexistence after going through the stages of convergence and divergence. After the stage of convergence, in which a monocentric point of view was dominant, the stage of coexistence has appeared where plural norms are recognized as being equal. The subsequent development of plurilingualism in the EU and the consciousness of language right stimulated the process of restructuring the differing norms. In this study, the ongoing destandardization is examined in terms of the realigning process of the German norms.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、言語学
キーワード：標準化、脱標準化、複数中心地的言語観、標準変種、単一中心地的言語観

１．研究開始当初の背景

先行研究を通じて、19 世紀末以来行われてきた標準化政策によりある程度の統一規範が達成されたが、同時に記述主義的傾向の増大と複数の国家変種の確立による規範の分散（Divergenz）が進行していることがわかってきた。こうした規範の分散は言語的収束がある程度達成された後の現象であり、近代初期の多様なドイツ語への回帰とは異なる点を忘れてはならない。EU の存続基盤ともいえる多言語・多文化主義は、少数言語や地域文化の保護を促したばかりでなく、言語の多様性を擁護する動きをももたらした。ドイツ語については、複数の国家変種の承認ならびに地域変種の保護を求める多変種主義が後押しされることになった(高橋 2006a)。それに伴い外国語としてのドイツ語教育領域でも、どの変種を教育変種とすべきかを論じなければならなくなっている（Takahashi 2006b は現時点での可能性を提示)。このような規範の分散化傾向は「脱標準化現象」（Destandardisierungsphänomene）（Mattheier 1997: 2）と呼ばれ、多面的な研究が行われてきた。しかし、脱標準化は標準化を前提とするが、その前提となる「標準」を何に求めているかが曖昧である。一般には「規範典」（Normkodex）がその根拠となりうるが、規範典自体が記述主義的傾向を帯びてきたという点と、幅広い規範のどの規則を適用するかにより生じるスタイルの問題をいかに分析するかという点はまだ十分解明されていない。また、規範論的には、脱標準化が規範の強度の低下によるものか、結晶度の低下によるものかも区別して分析しなければならない（規範論については Takahashi 2004）。一方、EU 内における言語ステータス政策の視点から見ると、規範の分散はドイツ語の地位低下にもつながるので、他言語との関係では規範の収束への力が作用することもある（高橋 2006）。脱標準化の問題では、このような言語政策的視点も踏まえて、規範を動的に記述できる枠組み構築が望まれる。

【参考文献】

Mattheier, Klaus J. (1997). „Über Destandardisierung, Umstandardisierung und Standardisierung in modernen europäischen Standardsprachen.“ Hrsg. K. J. Mattheier und E. Radtke. *Standardisierung und Destandardisierung europäischer Nationalsprachen*. Frankfurt a. M.: Peter Lang, S.1-9.

Takahashi, Hideaki (2004). “Language Norms.“ *Sociolinguistics — International Handbook of the Science of Language and Society.* Eds. U. Ammon, N. Dittmar, K. J. Mattheier and P. Trudgill. Berlin: Walter de Gruyter, pp.172-179.

高橋秀彰（2006a）「多言語主義と多変種主義：EU の公用語政策とドイツ語規範の多様化」社会言語科学会第 18 回大会発表論文集, pp.28-31.

Takahashi, Hideaki (2006b). „Welche Varietät/en sollten Lehrende im DaF-Unterricht vermitteln?: eine soziolinguistische und sprachpolitische Überlegung“ Hrsg. Pawel Karnowski und Imre Szigeti. *Sprache und Sprachverarbeitung*. Frankfurt a.M.: Peter Lang, S.381-392.

２．研究の目的

[1]　従来、標準ドイツ語の基準として規範典の存在とその公的妥当性が挙げられてきたが、記述主義的色彩が強くなりつつある規範典の規範性については十分解明されていない。脱標準化とは、成文規範自体の分散なのか、成文規範からの逸脱の増加なのか、これまで曖昧にされてきたこの問題点を明らかにする。
[2]　規範典の成熟期に見られる脱標準化現象は単なる規範の溶解ではなく、話しことば･書きことばによる標準形の使い分け、多様なメディアの出現、言語権の意識向上など、言語内外の要因の相互作用による規範の再構成過程であることを検証する。
[3]　(1)と(2)の成果を踏まえて、「正しさ」の指針としての標準語がいかなる影響を持ちうるのか、また、より妥当性のある標準語の記述法にどのような可能性があるかを示す。

３．研究の方法

（平成 19 年度）
１．先行研究の音声データの収集と分類（４月から）
　標準化・脱標準化を考察するには音声データが必要となるが、関連する標準変種の実証研究は、Takahashi（1996)や Auer（1990)、König（1989)などのデータを活用することができる。従って、徒に新たな音声データ収集を行うことはせず、これまでに蓄積されたデータを最大限活用して分析作業を進めた。この作業と並行して、他の関連文献も収集した。
２．現地での情報収集
　成文化が本格的に始まった 19 世紀末以来の社会的近代化や社会階層の変容、公文書における言語使用がわからなければ（脱）標準化の推移を論じることができない。20 世紀中頃までの文献は国内では入手困難なので、休暇を利用してドイツの図書館に直接赴いて２週間の資料調査を行った。またその機会を利用して、本研究テーマの権威である研究者から研究上の問題点について助言をもらい、研究計画を無駄なく進行させたい。具体的には Ulrich Ammon 教授（デュースブルク･エッセン大学）に専門的知識の提供を受けた。
上記先行研究などにより、公式な場面においても多様な変異形が使用されており、規範典からの逸脱が一般に見られることが既にわかっている。しかし、そのことから規範典の効力を否定することはできず、逸脱形態と成文規範、地域変種と成文規範との連関を踏まえた上で、上位変種としての成文規範を同定できるかについての分析が必要である。具体的には（a）地域変種への収束と標準変種への収束、(b）地域変種と標準変種の異同、(c）辞典への変異形採録と削除の推移を分析した。
成文規範としては、Duden das Aussprachewörterbuch (2005)、Duden die deutsche Rechtschreibung (2006)、Österreichisches Wörterbuch (2006)などの他に、包括的な変異形を記述した Variantenwörterbuch (2004)も分析の対象とした。

（平成 20 年度）
３．言語政策の分析
　19 世紀末以来行われてきたドイツ語標準化の変遷を、言語政策の視点から振り返り、規範の収束と分散がいかなる要因により発生してきたかを考察した。この領域で特に重要な研究である Stark (2002) と Ammon (2000) を参考にしながら、ドイツ連邦議会の公文書（Bundestagsdrucksache 等）やドイツ語史に関連する文献も分析の対象とした。特に重要な事象である(a) ２回の世界大戦におけるドイツ語諸国間の接近と離反、(b)戦後の周辺諸国との融和政策とドイツ語普及政策、(c)EU との関係での言語ステータス計画と言語コーパス政策が規範の収束と分散に及ぼす影響、の３点は重点的に考察した。EU については、EU の拡大とそれに伴う言語的多様性、言語的多様性とその言語政策的擁護との密接な関わり、ドイツ語変異形への寛容な態度との連関も考察した。態度については Takahashi（1996)、一昨年行った私が調査結果を参考にした。

（平成 21 年度）
４．変異形研究と言語政策との融合（４月から）
前年度までに行った、変異形と成文規範に関わる分析と、言語政策的経緯の研究を融合する。標準化過程を経て発展してきた成文規範と、多様な変異形使用を介して推論される脱標準化現象を解明するために、政治経済的、社会的事象を総合的に反映した言語政策を一体化させる作業を行った。

［参考文献］
Ammon, Ulrich (Hrsg.)(2000). Sprachförderung. Frankfurt a. M.: Peter Lang.
Ammon, Ulrich u. a. (2004). Variantenwörterbuch des Deutschen — Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol. Berlin: Walter de Gruyter.
Auer, Peter (1990). Phonologie der Alltagssprache: Eine Untersuchung zur Standard / Dialekt-Variation am Beispiel der Konstanzer Stadtsprache. Berlin: de Gruyter.
König, Werner (1989). *Atlas zur Aussprache des*

Schriftdeutschen in der Bundesrepublik Deutschland. 1. Aufl. 2 Bde. Ismaning: Max Hueber.
Stark, Franz (2002). *Deutsch in Europa ― Geschichte seiner Stellung und Ausstrahlung.* Asgard: Sankt Augstin.
Takahashi, Hideaki (1996). *Die richtige Aussprache des Deutschen in Deutschland, Österreich und der Schweiz.* Frankfurt a. M.: Peter Lang.

４．研究成果

19 世紀後半に開始されたドイツ語の標準化政策は、今日では大きな成果を収め、正書法、正音法、文法など包括的な辞典類が刊行されている。しかし、辞典類の作成に際しては、記述主義が底流にあり、記述されたから標準形であると認定されたと考えるわけにはいかない。また、複数中心地性に関する研究成果を反映し、国別の標準変種の記述への要求が高まっている。こうした、多様な変種容認の動きに呼応して、成文規範を守らなければならないという意識も低下している。

標準変種の音声変異形については、有声性や母音など変異が連続体を成している領域では分類・記述が容易ではないことなどの理由から、十分な検討が行われていない。これまでの研究を通じて国別で特徴的な音声変異形が確認されているものの、辞典類ではその一部しか取り上げておらず、何を基準にそれらの変異形を標準変種と認定しているのか、その選別基準はあいまいである。そこで、従来の研究成果に基づきながら、これら変異形の妥当性と辞典類（ドイツ、オーストリア、スイスで出版されたもの）での位置づけを考察し、標準変異形に相当すると判断される形式を提案した。

標準変種は言語学的要因だけでは規定できない。国際関係の状況によってドイツ語圏諸国は複雑に接近と離反を繰り返し、その都度オーストリアやスイスはドイツからの距離感を調整する言語政策を採ってきた。そのため、オーストリアとスイスの変異形は、国内での収束に加えてドイツへの心理的距離の置き方も考慮しなければ同定することはできない。このような言語政策的背景に基づいて単一中心地的言語観が相対化される現象は、規範の分散という意味で広義の脱標準化と考えられる。

この現象と並行して、伝統的な地域方言から超地域的な変種へ移行することによる脱標準化現象も進行中である。地域的音声特徴も存続していることは言うまでもないが、標準変種を使用する場面における地域的音声への逸脱は減少傾向にあり、縮約形など超地域的な音声特徴が広がりつつある。このような超地域的変異形と地域的変異形が標準変種の使用の際に混合し、中間的な変種が発生している。脱標準化は方言への回帰ではなく、中間的変種の出現による規範の多極化であることを示した。

標準化政策では、当初は単一中心地的言語観が背景に収束を企図し、変異形の排除が主たる目的としていた。収束がある程度進行すると、多様な規範を容認しようという複数中心地的言語観が台頭し、規範の分散がうながされる。地域変種を承認することにより、地域方言が見直されることにもなり、それが方言ルネサンスという印象を与えている。これは標準化の進行により方言が衰退することへの危機感から方言を守ろうという意識にも呼応し、EU の多言語主義や言語権の意識向上がその流れを擁護しているのである。つまり脱標準化とは、ドイツ語圏全体の収束から、国・地域レベルでの収束に移行する状況であり、その際にそれぞれの地域方言を基盤とする変異形が吸い上げられる現象と考えることができよう。だた、収束が進行した後の分散なので、伝統的な地域方言がそのまま復活するのではなく、発音上の縮約など超地域的な特徴を持つ変種が出現することとなった。脱標準化とは、単なる方言への回帰ではなく、単一中心地的言語観に基づく標準形の相対化による多様な標準変種の確立と、音声的縮約など超地域的な特徴を持つ変種の拡充傾向であることを明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 高橋秀彰、スイス連邦の公用語と国語―史的背景と憲法上の言語規定―、外国語学部紀要第 1 号、2009、pp. 27-40（査読無）
② 高橋秀彰、標準ドイツ語の収束と分散―標準変種の確立と脱標準化に関する考察―、外国語教育研究第 17 号、2009、pp. 83-98（査読無）
③ 高橋秀彰、ドイツ語圏スイスにおける言語状況：標準変種の規範化と方言の拡大、外国語教育研究第 15 号、2008、pp. 71-85（査読無）

〔図書〕（計１件）
① 高橋秀彰、ドイツ語圏の言語政策―ヨーロッパの多言語主義と英語普及のはざまで、関西大学出版部、271 ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋秀彰（TAKAHASHI HIDEAKI）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：60296944